

# 車 輪

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



仁和寺院家跡で発見された車輪



輪木の各部分

車輪を発見した!! この写真は一体何かわかりますか?

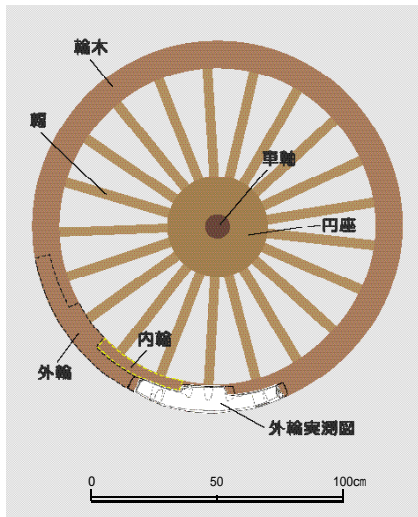
これは木製の車輪の部品です。車輪なんて、遺跡からたくさん出土しているように思われるかもしれませんが、これまで、平城京などから数例しか出土していません。わたしたちの毎日の暮らしに「車」は欠かすことのできないものです

が、古代の車については、案外わかっていないものです。

この車輪が見つかった場所は、平安時代中期末頃に造られた仁和寺の院家である「浄光院」推定地の池上千手堂にあたります。建物(リーフレット京都・161)の西側には、平安時代後期から鎌倉時代の建物の柱穴・ゴミ捨て穴・

溝・井戸などがあり、寺院内の雑舎などの諸施設があった地域と考えられます。車輪の部品2点は井戸の中から発見しました。

車輪が出土した井戸 井戸は方形で、井戸枠の大きさは一辺1.3mで、1.7mの深さまで残っていました。井戸枠は内側に四角に組んだ角材を2段入れて板を立て並



車輪 1 の復元図



雑車

『年中行事絵巻』「日本の絵巻 8」中央公論新社を参考にした

べており、井戸の底には曲物を据えています。埋土の下層から、多数の土器類と共に、木製車輪・箸などの木製品が出土しました。これらの遺物は、井戸を埋める際にゴミとして捨てられたもので、車輪の年代は平安時代後期のものとわかりました。

車輪の形と大きさ 車輪の部品は2点とも同じ形ですが、大きさが少し違います。この車輪（車輪1・2）をよく観察しましょう。

全体は円弧状になっており、中央の内側には台形の突起があります。両端には凸と凹のほぞが作られ、となりの部材と組み合うようになっています。

中央1箇所と両側2箇所に長方形の穴が穿たれています。中央は内側半分まで、両側は貫通しています。中央部の突起部の両側には内輪を取付けるほぞ穴が彫り込まれています。車輪1のほぞ穴の中には、角材の一部と、それを外から止めるためのくさびの一部が残っています。材料にはカシが使われていて、漆などは塗られていませんでした。

大きさは、車輪1が長さ70cm、車輪2が68cmです。幅は両者とも端部は6cmで、中央部が10cmです。厚さはいずれも約4cmです。

外側の面は使用のため片減りし、小石がめり込んでおり、使えなくなって捨てられたものと考えられます。

車輪の復元 今回発見した車輪は、上図のように組み合わせ式で、リムにあたる輪（<sup>りんぎ</sup>輪木）は、外側の外輪（<sup>そとわ</sup>）と内側の内輪（<sup>うちわ</sup>）を互い違いにはめ込んで組み合わせ、丈夫にしています。発見した部品は、いずれも輪木の外側の外輪にあたります。方形穴の中に残っていた角材は輻（<sup>や</sup>）の一部です。ただ残念なことに、内輪や車軸、軸受けにあたる（<sup>えんぎ</sup>）円座、円座と輪木をつなぐスポークにあたる輻は出土していません。

今回発見した輪木から車輪全体を復元すると、直径は車輪1が1.48m、車輪2が1.44mで、いずれも外輪7枚で、輻21本に復元できます。

古代の車には、公家の常用の乗り物である牛車と、貨物運搬用の雑車にわけられます。『国史大事

典』によると、牛車は輪木8枚・輻24本で、雑車は輪木7枚・輻21本とあります。そうであれば、今回見つかった車輪は、雑車に使用されていたかも知れません。

雑車は二輪車で、軸の上に板張りの床を取り付け、周囲に荷物が落ちるのを防ぐ枠を設けて、引き手である（<sup>ながえ</sup>）轆を付けています。車を引くのは牛または人力で、牛の場合は牛童が床上に乗って牛の鼻綱を取り、鞭を振るって牛を追っていました。

このような車は、絵巻物に多く描かれ、物語にも出てきますが、木製であることや平安京や周辺の道路の路面状態が悪いこともあって、今回のもののように片減りして、わりと短期間で使用できなくなると考えられます。

現在では荷車など、もうほとんど見ることは出来ませんが、葵祭りの牛車や祇園祭の山鉾には、今でも組み合わせ式の車輪が使われています。今度、祭りの折りにでも、仕組みを観察してみるのもおもしろいと思います。

（上村 和直）